



マイナス10度 テントはバリバリ。冷たい風が吹き抜けてゆく雪の上でしゃがみながら、実に人間とは不便なものだと考えていた。二日間人間に会わなかったけれども、動物の足跡は実に豊富で、その足跡や、踏み外した跡 よじ登ったり、さまよう足跡を見ていると、彼らはこの冷え切った山の中で実に自由に生きている。人間は、道を見失うといっしょうけんめいリートを探し、雪の斜面をよじ登り、滑り落ちそうになりながら横こへずり、赤くなったり青くなったりしながら微々たる歩みを続けてゆく。それでも二日目、山の頂上から昨夜テントを張った山頂をはるかに見とめると、私たちのわずかな一歩一歩の積み重ねがこんなにも大きなものになるのだと不思議な大きさに感動する。「こんなにも歩いたんだねー。」と友人がふっともらす。「遠いねー。」と答える目は、遠く、浅間や真っ白な北アルプス、戸隠や日光方面の雪の頂の明るい広がりを漂っている。久しぶりにきっぱりと雪青れた気持ちのいい山だった。もっとも帰り、あと2キロでバス停だという樹林の下りをのんびり歩いていてひっくり返り足首をひねってしまった。ポキッと大きな音がしてしばらく力が入らず立てなかったが、杖を借りてようやく立ち上がり、何とか下りきった。バス停近くのラーメン屋で一杯やって帰つもりだったが、もう店を閉めていてがっかりしたもの、友人は閉まった店に声をかけてくれて、ビールにはありつけた。ありがたいものだ。残ったウイスキーをすすってゆっくりバスを待つ。駅に着くと、まともに歩けないものだから、友人にいつもの飲み屋がやっているか偵察に出てもらったが、そこはまだやっていなかったなので、別の飲み屋で熱燗で体を温めてから杖にすがって帰った。翌日、ズリズリと足を引きずって医者に行くと骨が折れたり筋が切れたりはしていなかったので安心して、またズリズリピョコタンと帰って来たが、全治3週間、いまだにまともに歩けないが、そんなことも言っていられない。もう30日にはバングラへ出発するのだし、何とかしなければならぬ。どっちにしてもいつも体が万全ということはまずないのだから、あまり悲観的にはならない。動きながら直していくことができなければ、遠く苦しい場所には行くのが難しいと思っています。まあ、そんなことで日本の清々しい冬の山並みや、凜と冷え切った空気を胸に、新たな気持ちでまた暖かいバングラの村々を山の仲間と歩いてきます。今度は向こうへ行ってからどうするか何をやるか考えて動かしがい、それはいつもの山と大して変わらない。私たちが出来る可能なことを目の前に並べて、きっちりとした判断を積み重ねてゆくしかない。判断の基準は今までの私たちの生き方生きる姿勢そのものだから、その点には何の不安もない。まあ英語がしゃべれればもっと良いのはよいのだが、ないものねだりしても仕方ない。ということで今月もまたさまよっています。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com